唐代（618-907）の庭園植物と植栽形式に関する研究

Plants and Planting Design of Gardens in the Tang Dynasty(618-907) of China

李 樹華* 林 まゆみ*
Shuhua LI Mayumi HAYASHI

摘要：唐代は中国文化・芸術が大発展を遂げた時代であったが、同時に庭園事業も全盛の時期でもあった。唐の時代は中国庭園史上に極めて重要な位置を占めている。本研究では、『唐詩類苑』、『古今圖書集成』草木典など8文献資料を調べ、唐代における庭園植物や植栽形式について考察を試みたものである。成果としては、当時の庭園に植えられた針葉樹類、広葉樹類、花木類、竹・ヤシ類、草花類及び果樹類、葉草類の種類を明らかにした上で、それらの庭園植物の植栽形式と植栽場所も同時に検討し、更に唐代における中国庭園の伝統的な植栽法の「松竹梅」、「桃紅柳緑」、「玉堂春富貴」及び「梅蘭竹菊」に関しても考察を行った。

1. はじめに

李淵（565-635、唐の高祖）は、隋（581-618）の恭帝侑（605-619）の禅を受けて国を興し、国号を「唐」とし、長安（現在の西安）を都と定めた。次いで太宗皇帝世民（597-649）は副都の洛陽宮を建設し、内治外征に努めた。その範囲は揚子江や黄河の流域、更に他の広大な地域に及び、漢民族が最も栄えた王朝であった。その後、朝廷の威力が衰へ、昭宣帝李祝（892-908）時代の907年、権勢をほしいままにした汴の節度朱全忠は遂に帝を殺害して都を汴に遷して国号を「梁」とした。唐王朝は20世、289年で滅亡する。

唐王朝初期には、政治・経済の大改革によって、社会は安定し、外来文化をも吸収して、文学、芸術、技術ともに驚異的な発展を遂げたが、同時に、庭園事業も飛躍的に進歩した。唐代は中国庭園史上に全盛期であったのである。当時の庭園は所有者によって三種類に大別することができる。皇室が所有する皇家庭園、庶民が所有する私家庭園（文人庭園を含む）、及び宗教（主に仏教と道教）施設に付属する寺観（寺は仏教の建物、観は道教の建物）庭園に分けることができる。唐代の代表的な皇家庭園には、宮城の内にある大内御苑の西苑（洛陽にある）、禁苑、大明宮、興慶宮（以上三者は長安にある）、宮城以外では離宮御苑の華清宮（長安東35キロの臨潼県）、行在所にある行宮御苑の九行宮（長

安西北350キロの麟遊県）などがある。私家庭園には、都市にある私園（安樂皇女の定昆池など多数）、郊外別荘園（白居易の廬山草堂、王維の輞川別業、李徳裕の平泉山荘など）がある。宗教の全盛に伴い、全国に建てられた寺や観などの宗教建築は数多くあり、長安城内に限っても195所を数える。大部分に庭園がある¹⁾。

植栽は中国庭園の構成上最も重要なものの一つである。従って当時の庭園に植栽された植物種類は数多く、植栽形式も多様化していた（図1参照）。唐代庭園に関して総括的な研究は少ないが²⁾³⁾⁴⁾⁵⁾⁶⁾、庭園植物に関する研究はなお、未開拓の分野といえる。庭園に植栽された植物の種類と植栽形式は十分に明らかにされていない現状のようである。従って、唐代の庭園植物と植栽形式に関する検討を行うことは必要な課題と考えるものである。

唐代庭園の発掘遺跡は僅かで、現存する庭園は一個所も残されておらず、庭園植物に関する研究は、歴史文献資料を調べる以外には方法がない。従って、本研究では、8種の基本的な文学、絵画資料⁷⁾⁸⁾および植物関係の文献を調査、分析し、唐代庭園植物の種類、植栽形式及び植栽場所などについて検討を試みる次第である。

2. 唐代の庭園植物と植栽形式

研究の便宜のために、唐代庭園に植栽された植物を針葉樹、広葉樹、花木、竹・ヤシ、草花及び果樹・葉草などに分類し、検討することにする。

（1）針葉樹類

（i）マツ類（マツ科、松、松、*Pinus spp.*）⁹⁾

マツの植栽は、唐代より800年以上も早い秦代（B.C.221-B.C.206）に始まるが、初めは街路樹として用いられたようである¹⁰⁾。唐代に至り、造園技術の発展と共に、マツは最も重要な庭園樹木の一つとして利用されるようになった。

明の張玄超等によって編纂された『唐詩類苑』には、唐代の詩

図-1 陝西省長安県南里王村唐墓壁画にみられら官女が庭木の傍らで琵琶などを奏で憩う情景（1987年発掘、『中国美術全集』絵画集・墓室壁画より）

*姫路工業大学自然・環境科学研究所／兵庫県立淡路景観園芸学校

28245 首が収録されているが、そのうち植物詩は 1271 首、全詩の 4.5%をしめている。植物詩の中に登場する植物は、ヤナギが第 1 位で 170 首、マツが第 2 位で 77 首だが¹¹⁾、77 首の大部分は庭園に植えられているマツを詠んだものである。

唐代にマツが植栽された庭園は次の通りである。①皇家庭園については、周存の「禁中春松」に「幾歳含真節，青々紫禁中，日華留偃蓋，雉尾転春風。」(『唐詩類苑』¹²⁾ 卷 194 所収，以下とくに出典を注記せぬ引用詩は，すべて『唐』巻 194 に所収のものである)，常沂の「禁中春松」に「映殿松偏好，森森禁中攢。」などと詠まれている。詩題と句中にみえる「禁中」の意味は，皇宮中の庭園，即ち皇家庭園である。②私家庭園については，白居易の「庭松」に「堂下何所有，十松當我階，乱立無行次，高下亦不齊。」陸龜蒙の「襲美庭中初植松桂偶題」などの詩にみえる。③寺観庭園については，李胄の「文宣王廟古松」，白居易の「題流溝寺古松」，崔塗の「題浄衆寺古松」及び曹松の「僧院松」などの詩にみえる。

マツが庭園中に植栽された場所は以下の通りである。①水辺におけるマツについては，白居易の「題遺愛寺前溪松」に「偃垂長松樹，侵臨小石溪，靜將流水對，高共遠峰齊」にみえる。②谷辺については，崔塗の「澗松」にみえる。③階段の前については，杜甫の「嚴鄭公階下新松」などにみえる。④軒の周りについては，李白の「南軒松」にみえる。⑤樓の周りについては，李正封の「貢院樓北新栽小松」にみえる。⑥石の上については，儲光羲の「石子松」「盤石青巖下，松生盤石中」にみえる。

庭園中におけるマツの植栽形式は，一列に植える並木形式，森のように植える林植形式，入り口などに左右対称植える二本対植形式及び庭園中のある重要場所に植える単植形式などがある。①並木については，李胄の「文宣王廟古松」に「列植成均裏，分行古廟前，陰森非一日，蒼翠自何年」にみえる。②林植については，白居易の「庭松」に「堂下何所有，十松當我階，乱立無行次，高下亦不齊。」にみえる。③二本対植については，白居易の「寄題盤屋廳前双松」，曹唐の「題子姪書院双松」などにみえる。④単植については，劉希夷の「孤松篇」などにみえる。

庭園中にマツはしばしば他の植物と配植されている。主な配植例は次の通りである。①マツとタケとウメとの配植(松竹梅)については，朱慶余の「早梅」に「艷寒宜雨露，香冷隔塵埃，堪把依松竹，良塗一處栽。」(『唐』巻 190) にみえる。②マツとタケとモモとの配植(松竹桃)については，白居易の「夜桃花」に「一樹紅桃垂弘池，竹遮松蔭夜開時」(『唐』巻 192) にみえる。③マツとタケとオウバイとの配植(松竹迎春)については，白居易の「代迎春花招劉郎中」に「幸與松筠相近栽，不随桃李一時開」(『唐』巻 190) にみえる。④マツとモクセイとの配植(松桂)については，陸龜蒙の「襲美庭中初植松桂偶題」(『唐』巻 194) に

みえる。

また，唐代においては庭園の小型化に伴い，樹高が低く，姿が怪奇な松，即ち小松が大流行し，小松に関する詩は 20 首を数える。その中の代表的なものに李賀の「五粒小松図」(『全唐詩』巻 393)，李咸用の「小松歌」(『全唐詩』巻 644) および皮日休の「小松」(『全唐詩』巻 609) などがある。これらの文献資料によれば，小松の樹形・姿は次の如くである。①高さが矮小で，②姿が怪奇で，③葉が壮健・濃緑である。

なお，当時の庭園における松植栽の盛行によって，山から取り街頭で販売する風景もみられるようになった¹³⁾。

(ii) 他の針葉樹

庭園に植栽する針葉樹は，マツ以外にはコノデガシワとスギなどがある。①コノデガシワ(ヒノキ科，柏，側柏，*Biota orientalis*) は私家庭園(李商隱の「題小柏」「憐君孤秀植庭中，細葉輕陰滿座風」[『唐』巻 195] と李德裕の「平泉山莊草木記」)と寺観庭園(李商隱の「武侯廟古柏」[『唐』巻 195]) に植えられた。②ヒノキ(ヒノキ科，松，檜，*Chamaecyparis obtusa*) は主に寺観庭園中に二本対植の形で植えられた(皮日休の「重玄寺双矮松」，劉禹錫の「謝寺双松」及び温庭筠の「法華双松」[『唐』巻 195])。③スギ(スギ科，杉，柳杉，*Cryptomeria japonica*) は①のコノデガシワと同じく，私家庭園(韋応物的「郡齋移杉」[『唐』巻 195])と寺観庭園(皮日休の「詠古杉」「武丘寺殿前有古杉一本」[『唐』巻 195]) に植えられた。また，当時の政治家兼文人として有名であった李德裕(789-849) は，洛陽の郊外三十里の地に平泉山莊を営み，各地の珍木奇石を集め，「平泉山莊草木記」と「平泉山居戒子孫記」を著した。「平泉山莊草木記」にはイヌカラマツ(マツ科，金松，金錢松，*Pseudolarix kaempferi*)，カヤ(イヌガヤ科，榲，三尖杉，*Cephalotaxus sinensis*) 及びイブキの一品種(ヒノキ科，龍柏，龍柏，*Sabina chinensis* var. *Kaizuka*) なども記されており，平泉山莊庭園中には少なくとも上記の三種針葉樹も植えられていたことがわかる。

(2) 広葉樹類

(i) ヤナギ(ヤナギ科，柳，柳，*Salix* spp.)

ヤナギには，繁殖(挿し木)容易であること，生長が早く，水辺に適していること，美しい姿などの優れた点があるので，皇家庭園，私家庭園及び別荘に大量に植栽された。しかし，莊嚴な雰囲気包まれた寺観庭園に植栽する例は少なかったようである。植栽するヤナギの種類は主として二種あり，一種は黄河流域に中心に分布している枝が直立したウンリュウヤナギ(ペキンヤナギ)(早柳，*S. matsudana*) で，一種は長江流域に中心に分布している枝が垂れたシダレヤナギ(垂柳，*S. babylonica*) であると考えられる。

表－1 唐代庭園中植栽された広葉樹類(ヤナギ類以外に)

編号	文献中名称	中国名	和名	科名	学名	植栽形式・場所	文献出典
1	榿	榿木	ハンノキ	カバノキ科	<i>Alnus japonica</i>	庭園水辺	『唐』第195巻
2	檉	怪柳	ギョリュウ	ギョリュウ科	<i>Tamarix chinensis</i>	建築前	同上
3	楠	楠木		クスノキ科	<i>Phoebe zhennan</i>	寺などの庭園	同上
4	月桂	月桂	ゲッケイジュ	クスノキ科	<i>Laurus nobilis</i>	別荘庭園	『平泉山莊草木記』
5	貞桐	麒麟桐	ヒギリ	クマツヅラ科	<i>Clerodendron japonicus</i>	同上	同上
6	桐	白桐	シナギリ	グマノハグサ科	<i>Paulonia tomentosa</i>	寺などの庭園	『唐』第194巻
7	桑	桑	クワ	クワ科	<i>Morus bombycis</i>	庭園の周り	『唐』第195巻
8	櫟・白櫟	櫟	ニレ	ニレ科	<i>Ulmus pumila</i>		同上
9	楸	楸	トウキササギ	ノズンカズラ科	<i>Catalpa bungei</i>	フジと配植	『唐』第193巻
10	石楠	石楠	オオカナモチ	バラ科	<i>Photinia glabra</i>	私家庭園	『唐』第195巻
11	槐	槐	エンジュ	マメ科	<i>Sophora japonica</i>	庭木・並木	『唐』第193巻
12	冬青	冬青	ナナミノキ	モチノキ科	<i>Ilex chinensis</i>	寺院庭園	『唐』第195巻
13	楊	楊	ポプラ	ヤナギ科	<i>Populus</i> spp.	住宅前後	『唐』第193巻

庭園中におけるヤナギの植栽形式は以下の通りである。①種類別主題庭園と庭園中の景観コーナーについては、儲光羲の「薔薇」に「葡萄架上朝光滿，楊柳園中暝鳥飛」（『唐』巻189）とあることによって、「楊柳園」には主としてヤナギ（柳）やポプラ（楊）を植えていたことがわかる。文人官僚として有名な王維（699-759）は長安の藍田県に輞川別荘を造り、その景観について『輞川集』を著している。輞川に造られた二十の景観の中に「柳浪」といわれるコーナーがある。これはシダレヤナギを池の側に植え、池の浪と風にそよぐヤナギによって水面に揺れ動く波を鑑賞するゾーンであると考えられる。②ヤナギ林については、李咸用の「詠柳」に「日近煙饒還有意，東垣西掖幾千株。」（『唐』巻193）と詠われている如く、幾千株ものヤナギが植えられ、樹海の如き趣きがあったようである。③水辺並木（シダレヤナギ）については、ヤナギは好水性のため、川沿い、池沿い、及び堤によく植えられた。その情景は、太宗の「賦得臨池柳」（『唐』巻193）、方干の「柳」に「搖曳惹風吹，臨堤軟勝糸。」（『唐』巻193）、戴叔倫の「堤上柳」（『唐』巻193）などに見える。特にシダレヤナギの間にはハナモモやウメなどの赤い花の花木類を植え、高（ヤナギ）と低（ハナモモ）、上（ハナモモの小枝）と下（シダレヤナギの小枝）、そして赤（ハナモモの花）と緑（ヤナギの葉、小枝）という対照によって、美しい風景を演じている。また、シダレヤナギとハナモモとの対照によって水に映った影は非常に美しい。これについては劉禹錫の「柳花詞」に「桃紅李白皆誇好，須得垂楊相發揮。」（『古今圖書集成』草木典¹⁴・巻264・柳部）に明瞭に述べられている。この植栽法は「桃紅柳緑」といわれ、中国庭園における最も重要な伝統的植栽法の一つである。有名な杭州西湖の蘇堤にシダレヤナギとモモとが植えられているが、その代表的な例であろう。

(ii) 他の広葉樹類

唐代庭園中に植えられた広葉樹類としては、ヤナギ以外に13種ある（表1¹⁵参照）。

（3）花木類

(i) ボタン（ボタン科、木芍薬・牡丹、牡丹、*Paeonia suffruticosa*）

ボタンは中国の西北地方に原産し、隋唐時代以前には山野に自生する状態で、その根の部分の皮（丹皮）が薬用として用いられていた。唐の開元年間（713-741）に至り、皇家庭園において観賞植物として栽培されて以来、広く行われるようになった¹⁶。当時、長安の興慶宮は牡丹栽培の中心地で、ここは玄宗皇帝と楊貴妃が牡丹を鑑賞した場所であったといわれる¹⁷。李白は皇帝の傍らにあって、幾つかの牡丹の詩を詠んだというのが¹⁸、皇室だけでなく、庶民も牡丹の鑑賞に熱中し、それはやがて長安の全域に流行する。劉禹錫は「賞牡丹」の詩の中で長安の人々が牡丹に熱中するありさまを「唯有牡丹真国色，花開時節動京城。」（『唐』巻189、以下とくに出典を注記せぬ引用詩は、すべて『唐』巻189に所収のものである）と詠んでいた。

ボタンは皇家庭園内にも大量に植えられたが、長安の寺観庭園にも私家庭園にも盛んに植えられた。①寺観庭園におけるボタンについては、白居易の「西明寺牡丹花時憶元九」や李商隱の「僧院牡丹」などに詠まれている。②私家庭園については、方干の「牡丹二首」「借問庭前早晚栽，座中疑是画屏開」，王建的「題所賃金宅看牡丹花」「賃金得花饒，初開恐是妖」などに詠まれている。

ボタンは大体庭園中の次のような場所に植えられた。①亭の周りについては、李咸用の「遠公亭牡丹」にみえる。人々は亭の中に座って周囲の景色やボタンなどの花木を鑑賞する。②欄の前については、温庭筠の「夜看牡丹」に「高低深淺一欄紅」，李建勳の「晚春送牡丹」に「携觴邀客繞朱欄」，劉禹錫の「和令狐相公別牡丹」に「平章宅裏一欄花」（『古』巻289・牡丹部）などにみ

える。欄とは庭園、住宅の欄干、手すりのことである。欄干の前にボタンを植え、或いはボタン花壇の周囲に欄干を設けるが、いずれにしても欄干にもたれてボタンを鑑賞するのである。③階段の前については、階段の前にボタンを植えておくと、開花の時に廊下や室内（窓、門を通して）から鑑賞することができる。白居易の「惜牡丹花二首」に「惆悵階前紅牡丹，晚來唯有兩枝殘。」と詠まれている。④道辺、溪辺については、李商隱が「牡丹」の詩に「庄徑復緣溝，當窓又映樓」と詠っているように庭園の道辺、溪辺にもよく植えられた。

中国庭園におけるボタン植栽の最も代表的な形式は、「玉堂春富貴」である。「玉堂春富貴」とは、庭園に四種類の伝統花木を植栽することで、「玉」は「玉蘭」の略称で、ハクモクレンのこと、「堂」と「海棠」の「棠」とは同音であることから、「カイドウ」のこと、「春」は「迎春」（オウバイの中国名）の「春」で、オウバイのこと、そして、「富貴」は「牡丹」の別名で、「ボタン」のことである。韓琮の「牡丹」に「桃時杏日不爭濃，葉帳陰成始放紅，曉艷遠分金掌露，暮香深惹玉堂風。」とあり、「玉堂」の文字がみられる。この詩によると、唐代にはすでに「玉堂富貴」、即ちハクモクレンとカイドウとボタンとの配植が始まっていたことが分かる。

ボタンは当時の最も重要な観賞植物であったため、ボタンの売買も盛んに行われ¹⁹、一株の値段もかなり高価であった²⁰。

武則天年間（684-705）から、長安におけるボタン植栽の盛行にともない、他の地域でもボタンの栽培が始まった。先ず、副都の洛陽²¹、後には、江南地域にも栽培が広がっていく²²。

(ii) ウメ（バラ科、梅、梅、*Prunus mume*）

ウメはボタンと並び、中国における最も重要な観賞植物の一つである。唐代の庭園には大量に植栽されたが、庭園の種類は以下の通りである。①種類別主題庭園については、李嶠の「詠梅」に「大庾歛寒光，南枝独早芳。」（『唐』巻192所収、以下とくに出典を注記せぬ引用詩は、すべて『唐』巻192に所収のものである）とある。「大庾」とは大庾嶺の簡称で、広東省にあるウメを中心に植栽した低い山である。また、白居易の「憶杭州梅花」には「伍相廟前繁似雪，孤山園裏麗如粧。」とある。孤山は杭州西湖の後湖と外湖の間にあるウメの観光地である。大庾嶺と孤山との二つの場所は、現在もなお中国における有名なウメの名勝地である。②皇家庭園については、鄭述誠は「華林園早梅」という詩を詠んでいる。華林園は建康（現在の南京市）の東北にあり、三国の呉（222-280）の時代から造園し始め、南朝時代（420-589）には主な皇家庭園となった。この詩によれば、ウメは庭園植物として少なくとも南朝から皇家庭園に植えられたと考えられる。③私家庭園については、孟浩然の「詠早梅」に「園花有早梅，年例犯寒開」，張謂の「寒舍早梅」に「階下双梅樹」とある。また、張九齡は「庭梅詩」，劉禹錫は「詠庭梅寄友人」詩を詠んでいる。これらの詩によれば、ウメは唐代の民家の庭園にも多量に植えられたことがわかる。

庭園にウメを植栽場所としては、①階段の前については、張謂の「官舍早梅」に「階下双梅樹，春來画不成。」（『古』巻208・梅部）とあり、この詩によって二本のウメが階段の前に植えられたことが分かる。②籬の傍らについては、崔魯の「梅」に「含情含態一枝枝，斜压漁家短短籬。」（『古』巻208・梅部）とある。籬はまがき、垣根のことであり、ウメをまがきの傍らに植えると雰囲気がよくなると考えられる。③溪水沿いについては、杜牧の「梅」に「輕盈照溪水，掩斂下瑤台」，韋處厚「梅溪」に「夾岸迎清素，交枝漾淺淪。」（『古』巻208・梅部）などがある。

ウメを庭園中に植栽する時、他の植物と一緒に植栽する場合の手法としては、「松竹梅」歳寒三友の手法がある（マツ節参照）。これ以外に④ウメと竹類との配植については、韋蟾の「梅」に

表－２ 唐代庭園中に植栽された花木類（ボタン、ウメ及びバラ以外に）

番号	文献中名称	中国名	和名	科名	学名	植栽形式・場所	文献出典
1	木芙蓉	木槿	ムクゲ	アオイ科	<i>Hibiscus syriacus</i>	別荘などの庭園	『平泉山荘草木記』
2	石榴、榴	石榴	ザクロ	ザクロ科	<i>Punica granatum</i>	私家庭園	『唐』第192巻
3	山石榴、山榴、勝國花	杜鵑花	サツキ、ツツジ	ツツジ科	<i>Rhododendron spp.</i>	寺院などの庭園	『唐』第189巻
4	海石榴、海榴、山茶	山茶花	ツバキ	ツバキ科	<i>Camellia japonica</i>	庭園の建物の前	『唐』第192巻
5	凌霄花	凌霄花	ノウゼンカズラ	ノウゼンカズラ科	<i>Campsis chinensis</i>	寺院庭園	『唐』第194巻
6	海紅花、海棠	海棠花	カイドウ	バラ科	<i>Malus × micromalus</i>	別荘などの庭園	『平泉山荘草木記』
7	山桃	山桃	ノモモ	バラ科	<i>Prunus davidiana</i>	同上	同上
8	桃	桃花	モモ	バラ科	<i>Prunus persica</i>	水辺、井戸傍、庭園	『唐』第189巻
9	杏	杏花	アンズ	バラ科	<i>Prunus armeniaca</i>	池沿い、杏花園	同上
10	櫻桃	毛櫻桃	ユスラウメ	バラ科	<i>Prunus tomentosa</i>	皇室、私家庭園	同上
11	山櫻	櫻桃	シナミザクラ	バラ科	<i>prunus pseudocerasus</i>	別荘などの庭園	『平泉山荘草木記』
12	木香	木香	モッコウバラ	バラ科	<i>Rosa banksiae</i>	庭園中の棚	『唐』第189巻
13	相思樹	相思樹	ソウシジュ	マメ科	<i>Acacia confusa</i>	別荘などの庭園	『平泉山荘草木記』
14	夜合花	合歡花	ネムノキ	マメ科	<i>Albizia julibrissin</i>	庭園中の壁傍	『唐』第189巻
15	紫荊	紫荊	ハナズオウ	マメ科	<i>Cercis chinensis</i>	私家庭園	同上
16	紅豆	紅豆	カリン	マメ科	<i>Ormosia hosiei</i>	別荘などの庭園	『平泉山荘草木記』
17	藤	紫藤	フジ	マメ科	<i>Wisteria sinensis</i>	庭園中の棚	『唐』第191巻
18	山茱萸	山茱萸	サンシュユ	ミズキ科	<i>Cornus officinalis</i>	住宅の窓の前	同上
19	紫薇	紫薇	サルスベリ	ミソハギ科	<i>Lagerstroemia indica</i>	庭園の隅など	『唐』第189巻
20	南燭	南天竹	ナンテン	メギ科	<i>Nandina domestica</i>	井戸傍など	『平泉山荘草木記』
21	丹桂	丹桂	キンモクセイ	モクセイ科	<i>Osmanthus fragrans</i> var. <i>aurantiacus</i>	別荘などの庭園	同上
22	金桂	金桂	サラサ モクセイ	モクセイ科	<i>Osmanthus fragrans</i> var. <i>thunbergii</i>	殿堂の前、林植	『唐』第189巻
23	迎春花	迎春花	オウバイ	モクセイ科	<i>Jasminum nudiflorum</i>	松、竹との配植	『唐』第190巻
24	丁香花	丁香花	ハシドイ、マン シュウハシドイ	モクセイ科	<i>Syringa spp.</i>	別荘などの庭園	『平泉山荘草木記』
25	木蘭花	玉蘭	ハクモクラン	モクラン科	<i>Magnolia denudata</i>	庭園中、亭の傍	『唐』第189巻
26	辛夷花	辛夷花	コブシ	モクラン科	<i>Magnolia liliiflora</i>	別荘などの庭園	『平泉山荘草木記』
27	厚朴	厚朴	ホオノキ	モクラン科	<i>Magnolia officinalis</i>	同上	同上
28	紫陽花	八仙花	アジサイ	ユキノシタ科	<i>Hydrangea macrophylla</i>	寺院などの仙壇	『唐』第189巻
29	枇杷	枇杷	ビワ	バラ科	<i>Eriobotrya japonica</i>	私家庭園	『唐』第192巻
30	玉簪花	玉簪花	トケイソウ	トケイソウ科	<i>Passiflora caerulea</i>	寺観庭園	『唐』第189巻

「高樹臨溪艶，低枝隔竹繁。」，劉言史の「竹裏梅」に「竹裏梅花相並枝，梅花正発竹枝垂。」とある。②ウメとランとの配植については，方干の「胡中丞早梅」に「芬郁合将蘭並茂，凝明応与雪相欺」とある。ウメと竹，ウメとランとの配植は，中国庭園の伝統的な「梅蘭竹菊」即ち，四君子植栽法の始まりであろう。

(iii) バラ（バラ科，薔薇，月季，*Rosa spp.*）

バラは灌木性，ツル性の観賞花木であり，唐代の寺観庭園については，孟郊の「漂陽唐興寺観薔薇花同諸公餞陳明府」（『唐』巻189，以下とくに出典を注記せぬ引用時は，すべて『唐』巻189に所収のものである），李咸用の「僧院薔薇」に，私家庭園については，方干の「朱秀才庭発薔薇」に記すところである。

庭園における植栽形式は次である。①バラ園については，賈島の「題興化園亭」に「破却千家作一池，不栽桃李種薔薇。」（『古』巻118・薔薇部）とある。この興化園は，バラを中心としたバラ園であろう。②バラの花棚については，バラはつる性でもあるから，庭園中に棚を造って鑑賞する。白居易の「裴常侍以題薔薇架十八韻見示因広為三十韻以和之」に「托質依高架，攢華对小堂，晚開春去後，独秀院中央。」とある。また，朱慶余の「題薔薇花」

に「四面垂條密，浮陰入夏清。」（『古』巻118・薔薇部）とある。「四面垂條密」とは棚の四周からバラの枝が垂れているありさまであろう。バラ棚は当時の庭園ではごく普通の設備であったと推測される。③花の壁については，バラはつる性，且つとげがあるため，壁にはわせると，壁面を緑化することにもなり，観賞の対象になる。これについては陸龜蒙の「薔薇」に「倚牆當戸自橫陳，致得貧家不似貧。」という詩にみえる。④水辺植栽については，李群玉の「臨水薔薇」に「浪揺千臉淚，風舞一叢芳」（『古』巻118・薔薇部）に見える。

また，李徳裕の「平泉山荘草木記」によれば，平泉山荘には八重咲きのバラ（百葉薔薇）と萼が二重のバラ（重台薔薇）を植えていたことが分かる。

(iv) 他の花木類

唐代庭園中にはボタン，ウメ及びバラの以外に30種の花木があるが，これについては表2参照。

（4）竹類・ヤシ類

(i) タケ類

竹類も唐代の重要な庭園植物の一つである。唐代では，主とし

て竹類を觀賞する庭園，即ち竹園が造られている。劉言史は「題竹園」で，竹園を詠う如く²³⁾，竹類が庭園中の主要景觀の一つになっていたことが分かる。例えば，王維の輞川別荘には竹にちなんで命名した建物「竹里館」や竹を中心にした景觀「斤竹嶺」があった²⁴⁾。王維と裴迪とは「斤竹嶺」と「竹里館」の詩を作った(『古』巻190・竹部，以下とくに出典を注記せぬ引用詩は，すべて『古』巻190・竹部に所収のものである)。

竹類は寺観庭園(李観の「隣人自金仙観移竹」，白居易の「寺院新竹」詩がある)，私家庭園の植物材料にもなった。劉巖夫の「植竹記」には竹の植栽法について次のように述べている。「秋八月，劉氏徙竹凡百余本，列於室之東西軒泉之南北隅，克全其根，不傷其性，載旧土而植新地。」²⁵⁾。また，竹類を庭園中に植栽して竹林，竹径(竹林中の道)，竹溪(竹林中の流れ)などの風致が造ることもあった。①竹林については，白居易が著した「池上篇」序には「十畝之宅，五畝之園。有水一池，有竹千竿」とある。この竹林はこの池上の庭園中の中心となる景觀であったと考えられる。②竹径については，権徳輿の「竹径偶然作」と鮑溶の「竹裏径」などに記述がみられる。③竹溪については，韓愈の「竹溪」がある。

庭園内における植栽場所は次の通りである。①臨階竹。これは階段の前に植える竹類のことで，廬照隣の「賦得隣階竹」(『唐』巻189所収，以下とくに出典を注記せぬ引用詩は，すべて『唐』巻189に所収のものである)がある。②臨池竹。池沿いに植える竹類のことで，太宗の「賦得臨池竹」と虞世南の「賦得臨池竹応制」などにみえる。③窓竹。窓を通してみた竹類のことで，白居易の「題李次雲窓竹」，劉兼の「新竹」に「近窓臥砌両三叢，佐静添幽別有功。」などにみえる。④亭竹。皮日休の「新竹」に「笠沢多異竹，移之植後檻」とある。詩句中の「檻」は亭の意味である。

また，郎士元の「和王相公題中書叢竹寄上元相公」詩には「多時仙擁裏，色並翠琅玕，幽意含煙月，清陰庇蘭。」とある如く，竹林の中にランを植栽することは，中国庭園の伝統的な「梅蘭竹菊」を用いた四君子植栽法の先駆をなすものであった。

唐代庭園に植栽された竹類の種類は，色彩，模様的美丽な錦竹(杜甫「從韋二明府統処覓錦竹三数叢」)，稈が緑色の緑竹(宋之問「緑竹引」)，節が短密の慈竹(元稹「和東川李相公慈竹十二韻」「慈竹不外長，密比青瑤華。」)，稈に斑点状ある斑竹(劉長卿「斑竹」)及び苦い味のする苦竹(杜甫「苦竹」「味苦夏虫避」)などがあった。

(ii) ヤシ類

唐代庭園に植栽していたヤシ類の主な種類に，ヤシ(ヤシ科，椰子，椰子，*Cocos nucifera*) (『唐』巻195)，パショウ(パショウ科，芭蕉，芭蕉，*Musa basjoo*) (『唐』巻191)，カンノンチク(ヤシ科，棕竹，棕竹，*Rhapis excelsa*) (『唐』巻

191) 及びシュロ(ヤシ科，棕櫚，棕櫚，*Trachycarpus fortunei*) (『唐』巻191) などがある。これらの文献によれば，その主な植栽形式は，官府庭園(シュロ)，住宅の窓の前(パショウ，雨が降る時，水滴が葉の表面に滴り落ちる音を聞く)などのあることが分かる。

(5) 草花類

(i) キク類(キク科，菊，菊，*Dendranthema grandiflorum*)

キク類は鑑賞用宿根草花として，唐代の皇家庭園(白居易「和錢員外早冬翫禁中新菊」(『唐』巻189，以下とくに出典を注記せぬ引用詩は，すべて『唐』巻189に所収のものである)と私家庭園(韋莊「庭前菊」「為憶長安爛漫開，我今移爾滿庭栽。」)にも植えられたが，同時に薬用としても庭園で栽培されていた²⁶⁾。

公乘億の「賦得秋菊有佳色」「陶令籬辺菊，秋来色転佳」，元稹の「菊花」「秋叢繞舍似陶家，遍繞籬辺日漸斜」及び白居易の「東園翫菊」「唯有几叢菊，新開籬落間」などに述べられる如く，当時は庭園中に籬を作り，その傍らにキクを植えるという植栽法が流行したが，これは陶潜(372-430，字は淵明)のキクを詠う有名な詩句「採菊東籬下，悠然見南山」の影響を受けたからと考えられる。

キクを植栽する場合は，常にラン或いはクコと配植している。ランと配植する場合は，陸龜蒙の「恩門小諫雨中乞菊栽」「握蘭将満歳，栽菊伴吟詩。」(『古』巻91・菊部)にみえる。クコとの配植は，同じく陸龜蒙の「杞菊賦」に「天随生宅荒，少牆多隙地，著図書所前後，皆樹以杞菊，春苗恣肥，得以採供左右杯案。」(『古』巻91・菊部)にみえる。

(ii) ハナハス(スイレン科，芙蓉，蓮花・荷花，*Nelumba nucifera*)

中国庭園の池には常にハナハスを植え付けている。唐代にも例外ではなかった。①皇家庭園については，張仲素が禁苑中の西内苑に植栽されたハナハスを詠って「賀西内嘉蓮表」(『古』巻94・蓮部，以下とくに出典を注記せぬ引用文献は，すべて『古』巻94・蓮部に所収のものである)を著している。廬照隣は皇家庭園の曲江池中に植えたハナハスを詠った「曲池荷」を作った。太宗皇帝は「採芙蓉」に「枯伴戲芳塘，携手上彫航，船移分細浪，風散動浮香。」と詠み，ハナハスの花が咲く時期，皇家庭園において花を採摘した情景を詠んでいる。②寺観庭園について。寺院の正門に入ると，池があり，池の上に架けられた(石)橋を渡ってから本堂に至るのであるが，この池中には必ず仏教と関係あるハナハスとスイレン(*Nymphaea alba*)を植える。寺観に植えたハナハスは白居易の「東林寺白蓮」と韋応物の「慈恩寺南池秋荷詠」(『唐』巻190)などにみえる。③私家庭園について。大規模の庭園では池を掘って，ハナハスを植える。例えば，白居易が元和年間(806-820)江州司馬の官職にあった時，廬山に草堂と称する別荘と庭園を造り，その中に白いハナハスを植えた²⁷⁾。住宅

表－3 唐代庭園中に植栽された草花類(キク，ハナハス以外に)

番号	文献中名称	中国名	和名	科名	学名	植栽形式・場所	文献出典
1	芙蓉	芙蓉	フヨウ	アオイ科	<i>Hibiscus mutabilis</i>	庭園中の水辺	『唐』第190巻
2	葵花	向日葵	ヒマワリ	キク科	<i>Helianthus annuus</i>	私家庭園	『唐』第189巻
3	麗春花	虞美人	ヒナゲシ	ケシ科	<i>Papaver rhoeas</i>	同上	同上
4	石竹	石竹	セキチク	ナデシコ科	<i>Dianthus chinensis</i>	庭園中の階段の前	『唐』第194巻
5	菱	菱	ヒシ	ヒシ科	<i>Trapa natans</i>	池、溪流	『唐』第190巻
6	鶏頭花	鶏冠花	ケイトウ	ヒユ科	<i>Celosia argentea</i>	庭園中の石の傍など	同上
7	金錢花	打碗花	ヒルガオ	ヒルガオ科	<i>Calystegia hederacea</i>	庭園にまとうせる	同上
8	石蓮花	景天	ベンケイソウ	ベンケイソウ科	<i>Sedum spp.</i>	庭石の上	同上
9	芍薬	芍薬	シャクヤク	ボタン科	<i>Paeonia lactiflora</i>	庭園中、階段前	『唐』第189巻
10	萱草	萱草	キスゲ、カンゾウ	ユリ科	<i>Hemerocallis spp.</i>	壁傍、階段前	『唐』第190巻
11	玉簪	玉簪	ギボウシ	ユリ科	<i>Hosta spp.</i>	庭樹の下など	同上

庭園は規模が小さい空間と経済面などを考慮して小さい池、或いは地面に鉢や甕を埋めて水を注ぎ小池の如きものを作り、中にハナハスなどを植え、また、魚などを泳がせ、庭園中の観賞対象の一つにした。これについては韓愈「奉和錢七兄曹長盆池所植」(『唐』巻190)をはじめ数多くの詩が残っている。④鉢植のハスについては、王建の「和錢舍人水植詩」に「盆裏盛野泉，晚鮮幽池好，初活草根浮，重生荷葉小。」(『唐』巻190)とある。これは盆栽ハスを詠った詩句である。

ハナハスを鑑賞するためには、周囲に土手のある蓮花塢(廬照隣「題蓮花塢」(『古』草木典・巻94・蓮部))、堤のある蓮塘(姚合「蓮塘」)、蓮池(韓愈「荷池」および假山がある池(白居易「西街渠中種蓮疊石頗有幽致偶題小樓」『唐』190巻))などが造られた。

当時のハナハスの品種は普通の淡紅色のハス、白色の白蓮(李徳裕「平泉山莊草木記」、李徳裕「白芙蓉賦」(金陵城西有白芙蓉，素萼盈尺，皎如霜雪。))、八重咲きの千葉蓮(崔融「為百官賀千葉瑞蓮表」)、萼の二重の重台蓮(李紳「重台蓮」、李徳裕「平泉山莊草木記」)及び一本の茎に二つ花咲きの双開蓮(劉商「詠双開蓮花」)などがあつた。

(iii) 他の草花類

唐代庭園中には植えられたキクとハナハスとの以外に11種の草花類については表3参照。

(6) 果樹類、菓草類

唐代においては食用・薬用としての果樹類、野菜類及び菓草類の栽培が盛んに行われたが、その中の一部は庭園中に植えられて観賞植物としても栽培された。「一石二鳥」の効用といえよう。

3. まとめ

上記の唐代の庭園植物と植栽形式に関して検討してきた結論・成果として、次のように纏めることが出来る。

(i) 唐代庭園に利用された多種多様な植物の種類を明らかにした。即ち、針葉樹類ではマツ類、コノデガシワ、ヒノキ、スギ、

イヌカラマツ、カヤ及びイブキ(の一種)など、広葉樹類では、ヤナギ類、ハンノキ、ギョリュウ、クスノキ、ゲッケイジュ、ヒギリ、シナギリ、クワ、ニレ、トウキササギ、オオカナメモチ、エンジュ、ナナミノキ及びボブナなど、花木類ではボタン、ウメ、バラ類、ムクゲ、ザクロ、サツキ・ツツジ類、ツバキ、ノウゼンカズラ、カイドウ、ノモモ、アンズ、ユスラウメ、シナミザクラ、モッコウバラ、ソウシジュ、ネムノキ、ハナズオウ、マメ科のカリン、フジ、サンシュユ、サルスベリ、ナンテン、キンモクセイ、サラサモクセイ、オウバイ、ハシドイ、マンシュウハシドイ、ハクモクレン、コブシ、ホオノキ、アジサイ及びビワなど、タケ・ヤシ類では、タケ類、ヤシ、バショウ、カンノンチク及びシュロなど、草花類ではキク類、ハナハス、フヨウ、ヒマワリ、ヒナゲシ、セキチク、ヒシ、ケイトウ、ヒルガオ、ベンケイソウ、シャクヤク、キスゲ、カンゾウ、ギボウシ及びトケイソウなどがある。そのうちのマツ類、ヤナギ類、バラ類、サツキ・ツツジ類、タケ類及びキク類などには、数多くの種・品種があることが推測された(しかし、文献資料を使ってそれを明らかにすることがほとんど不可能である)。

(ii) 唐代の植栽形式が多様化していたことを明らかにした。特にマツ類、ヤナギ類、ボタン、ウメ、バラ類、タケ類、キク類及びハナハスなどの主な種類に対して、その植栽形式、植栽する場所、他の植物との配植に関して検討した。

(iii) 唐代における中国庭園の伝統的な植栽法である「松竹梅」(マツとタケとウメとの配植)、「桃紅柳緑」(モモとヤナギとの間隔植栽法)、「玉堂春富貴」(モクレンとカイドウとオウバイとボタンの配植法)及び「梅蘭竹菊」(ウメとランとタケとキクとの配植法)に関して検討した。これらの植栽法は唐代に既に始まっていたことが分かる。

(iv) 本研究の関連研究として、以後、秦・漢・魏・晋・南北朝、及び宋・元・明・清中国歴代の庭園植物及び植栽に関する研究を計画している。研究に際しては、前の時代の庭園植物と植栽形式がその次の時代へどのように影響を与えたかについても検討する。

補注・参考文献

1) 周維權 (1990): 中国古典園林史: 清華大学出版社, 61-90	11) 中島敏夫 (1996): 唐詩類苑・下: 汲古書院 320-345	本, 紅, 紫, 浅紅, 通白者, 會花開, 上乘照夜白, 妃以步輦從, 詔選梨園弟子中優者…将欲歌之。」
2) 岡大路 (1943): 支那庭園論: 彰国社	12) これからの本稿の正文部分及び表1, 表2, 表3の『唐詩類苑』を『唐』に略記する。	18) 同前掲16)
3) 杉村勇造 (1966): 中国の庭: 求龍堂, 38-49	13) 唐詩類苑・巻194に記載されている白居易の「贈賣松者」, 僧修睦の「賣松者」および于武陵の「贈賣松人」。	19) 同前掲16)・牡丹部: 白居易「買花」「帝城春欲暮, 喧喧車馬度, 共道牡丹時, 相隨買花去。」
4) 同前掲1)	14) これからの本稿の正文部分の『古今圖書集成』草木典を『古』に略記する。	20) 唐詩類苑・巻189: 柳渾「正元中牡丹多」「近來無奈牡丹何, 數十千錢買一顆。」
5) 佐藤昌 (1991): 中国造園史(上)・隋唐時代: 日本公園緑地協会, 116-197	15) 表1, 表2及び表3には, 科名のかなの順番で, また, 同じ科内には学名のアルファベットの順番で並んでいる。種毎の文献に記載された名称 [文献中名称], 現在中国では使われている [中国名], 現在日本に使われている [和名], [科名], [学名], 庭園中に主な植栽形式と植える場所の [植栽形式・場所] 及び記載している資料 [文献出典] の項目を纏めている。	21) 宋・歐陽修・洛陽牡丹記
6) 孟亜男 (1993): 中国園林史: 文津出版社, 54-68	16) 古今圖書集成・草木典・巻289・牡丹部: 唐・舒元興・牡丹賦序	22) 同前掲16)・牡丹部: 張祐「杭州開元寺牡丹花」と張翥「觀江南牡丹」
7) 中国美術全集編輯委員会 (1984): 中国美術全集・絵画編2・隋唐五代絵画: 人民美術出版社	17) 同前掲16)・牡丹部: 唐・李白・清平調「開元時, 禁中初重木芍藥, 即今牡丹, 得四	23) 唐詩類苑・巻189: 劉言史「題竹園」「繞屋扶疎聳翠徑, 苔滋粉澱有幽情。」
8) 中国美術全集編輯委員会 (1989): 中国美術全集・絵画編12・墓室壁画: 文物出版社		24) 舊唐書・杜佑傳
9) 本稿では植物名称に関して次の例のように記す。例, マツ類 (和名) (マツ科, 松 [文献中の名称], 松 [現在の中国名], Pinus spp. [学名])。		25) 同前掲16)・巻190・竹部: 劉巖夫・植竹記
10) 漢書・賈山傳には「秦為馳道於天下, 廣五十步, 三丈而樹, 厚築其外, 隱以金錐, 樹以青松。」とある。		26) 同前掲16)・巻91・菊部: 姚合「病中辱朱諫議惠甘菊苗因以詩贈」「蕭蕭一畝宮, 種菊十余叢, 採摘和芳露, 封題寄病翁。」
		27) 唐・白居易「草堂記」「環池多山竹野卉, 池中生白蓮。」

Summary : The gardens in the Tang Dynasty(618-907) is very important in the history of Chinese gardens. This paper involves the study of the plants species and the planting design of gardens in the Tang Dynasty. The major results of the findings are:

- 1) The plant species used in gardens in the Tang Dynasty were clarified. The plant species include conifer, broadleaf, trees with ornamental flowers, bamboos, palm trees, flowering herbaceous, fruit trees and medicinal plants.
- 2) The planting design of gardens in the Tang Dynasty was elucidated.
- 3) The traditional planting design of Chinese garden was established in the Tang Dynasty. Those examples were as follows: the planting design of Pine, Bamboo and Mume, the planting design of Peach and Willow, the planting design of Lily magnolia, Micromalus, Winter jasmine and Tree paeony, and the planting design of Mume, Orchid, Bamboo and Chrysanthemum.